

〔研究発表〕

第一室 (11 月 8 日午後)

司会 三好 暢博 (旭川医科大学)

「感嘆文形成の認可に課される諸条件」
(Licensing Conditions for the Formation of Exclamative Sentences)

北田 伸一 (新潟大学)

英語では、目的語は感嘆文化できるが主語はできない (例えば、What a silly book Mary bought! vs. *What a silly person just called me on the phone! (Pesetsky and Torrego (2001[1]))。一方日本語では、目的語と主語のいずれの要素も感嘆文化できる (例えば、「この岩はなんて固い塀をプチ破ったのだ!」vs.「なんて大きな岩が道路を塞いでいるのだ!」)。こうした感嘆文化できる要素の言語間変異を捉えるために、本発表では、感嘆文はフェーズ主要部 v によって認可される談話構文であると提案する。この提案が一定の言語固有条件と連動することで、上記の言語間変異を含む感嘆文の様々な統語特性を原理的に説明できることを論証する。最後に本提案の帰結として、感嘆文と感嘆文を項として選択する述語との選択関係が、構成素統御の関係に基づいて概念・意図システムとのインターフェースで認可されることを論じる。

[1] “T-to-C Movement” In M. Kenstowicz (ed.) *Ken Hale*, MIT Press.

「主語の移動制約再考: Affix の観点から」
(Subject Movement Constraints Revisited: From a Perspective of Affix)

末永 広大 (長崎大学)

近年の極小主義プログラムでは、インターフェイス条件を満たす限りにおいて、併合操作は自由に適用されると想定されている (Chomsky (2015[1])). しかし、ラベルによる解釈などを除けば、当該条件の詳細な議論はあまり行われて来なかった。そこで本発表では、主語の移動制約に焦点を当て、自由併合の想定の下で、主語要素の移動の可否を統制するインターフェイス条件の考察を行う。

(1) 主語の移動: インターフェイス条件
= Free Merge + Interface Condition

(externalization problems with $[u\phi]$)

具体的には、Hayashi (2020[2]) 及び Suenaga (2025[3]) の分析に基づき、インターフェイスにおける ϕ 素性の外在化の問題によって主語要素の移動は制約されると提案し (= (1))、英語をはじめとする様々な言語データの考察を通して、その妥当性を検証する。

[1] “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond*, 3-16. [2] “Labling without Weak Heads,” *Syntax* 23, 275-294. [3] *The Interface-Based Analysis of Subject Movement*, Doctoral dissertation, Kyushu University.

第二室 (11 月 8 日午後)

司会 小田 博宗 (東京大学)

「African American Englishにおける主格付与に関する一考察」

(An Analysis of Nominative Case Assignment in African American English)

森竹 希望 (福岡大学)

本発表では、African American English (AAE) における主格主語の具現化と一致操作の関係を考察する。(1) のように、AAEでは三人称単数形の主格主語が用いられたとしても、標準英語と異なり、動詞や *do*、*have* 等に ϕ 素性一致の反映と考えられる “-s” 等の一致形態素が具現化しないことが一般的である (Labov et al. (1968) 他)。

- (1) a. He eat/He DO eat/He don't eat.
- b. He have/haven't ate.

(AAE; Green (1994: 71))

Newkirk-Turner and Green (2016) は、AAEは一致形態素を具現化させるメカニズムを欠くと述べており、これは言い換えるとAAEには ϕ 素性一致が存在しないことを意味する。しかし標準英語と異なりAAEでは ϕ 素性一致が欠如するならば、Chomsky (2000) 以降の理論的枠組みに基づく、そもそもなぜ主格主語が具現化できるのかが問題となる。

本研究では、Moritake (2022, 2024) のパラメータを伴う一致操作を援用し、AAEでは日本語と同様に格素性を介した上方一致が主格主語の具現化に寄与していると提案し、幼児のAAEにも言及しつつ妥当性を検証する。さらに、本分析が統語理論全体にもたらす理論的含意を述べる。

Green, L.(1994) “Study of Verb Classes in African American English,” *Linguistics and Education* 7, 65–81. / Moritake, N. (2022) “A Focus-Based Analysis of Nominative Objects in Japanese,” *Lingua* 278, 1–31. / Newkirk-Turner, B.L. and L. Green (2016) “Third Person Singular -S and Event Marking in Child African American English,” *Linguistic Variation* 16, 103–130.

「内的併合とラベルの二重性」

(Internal Merge and the Duality of Labeling)

佐藤 亮輔 (北海道教育大学)

句のラベル付けにおけるXP-YP問題の解決策として、Mizuguchi (2019 [1]) は多義的ラベル付け (以下AL) を提案している。ALによれば、2つの句XPとYPが併合された場合、そのいずれかをラベルとして選択可能である。Chomsky (2013 [2]) 等の素性共有が2つの句の素性の積集合 $X \cap Y$ を扱っているのに対し、ALはいわば、和集合 $X \cup Y$ を扱おうとしているように思われる。しかし、和集合 $X \cup Y$ にはXとYのいずれかだけでなく、その両方も含まれ、先験的にこの可能性を排除する理由はない。そこで本発表ではこの可能性を追究し、その帰結としてwonderを用いた分裂文や受動文等に説明を与える。

[1] “Ambiguous Labeling and Full Interpretation,” *Studia Linguistica* 73. [2] “Problems of Projection,” *Lingua* 130.

第三室 (11月8日午後)

司会 水谷 謙太 (愛知県立大学)

“Zibun, First-Person, and PRO: The Boundary between *De Se* and Non-*De Se*”

Asako Matsuda (Wayo Women’s University)

This study examines the interpretive behavior of the Japanese pronoun *zibun* in reported attitudes, and compares it to the English first-person pronoun *I* and

obligatory control PRO. Although *zibun* in such environments appears to be interpreted predominantly *de se*, results from my online survey (N=365) show that some Japanese speakers allow a non-*de se* reading. In fact, this parallels the interpretation of the English *I*. The central question is why *zibun* and *I* allow non-*de se* readings even in attitudinal contexts while PRO does not. With a slight modification of Higginbotham’s formulation of PRO developed within Montague-style event semantics [1][2], I propose the novel notion of *general identity*, which accounts for the availability of non-*de se* interpretations of *zibun* and *I*. Comparing *zibun*, *I*, and PRO helps clarify the boundary between nearly-*de se* and fully-*de se* interpretations.

[1] Higginbotham, J. (2003) “Remembering, Imagining...,” *Epistemology of Language*. [2] —. (2010). “On Words and Thoughts...,” *Context-Dependence, Perspective, and Relativity*.

「「自分」と「彼」の照応から見たde re信念文の分析」

(Anaphora and Attitudes *De Re*: Evidence from *Jibun* and *Kare*)

堤博一 (都留文科大学)

本発表では、日本語の信念文に現れる照応詞「自分」と「彼」の解釈を手がかりに、*de re*信念文の数量詞上昇 (QR) 分析、*res*移動 (RM) 分析 (Heim (1994[1])), および概念生成子 (CG) 分析 (Percus and Sauerland (2003[2])) を比較する。観察される事実は: (i) 照応詞「自分／彼」が*res*項となる場合、主節・従属節の主語いずれも先行詞に取れること、(ii) 記述的DP「自分の／彼の息子」が*res*項となる場合、「彼」は両方を先行詞に取れるが、「自分」は主節主語のみを先行詞に取れること、である。この事実は、「彼」にはない「自分」の主語指向性、記述的*res*項へのQR分析の適用、非記述的*res*項へのCG分析の適用を仮定すれば説明可能であり、RM分析よりもCG分析が経験的に優れていることを示す。

[1] “Comments on Abusch’s Theory of Tense” [2] “On the LF of Attitude Reports”

第四室 (11月8日午後)

司会 堀内 ふみ野 (日本女子大学)

「COHAにおける状態変化動詞に後続する変化結果を表す前置詞句の通時的分析—ベイズ推定を用いた情報幾何学的距離による可視化—」

(A Diachronic Analysis of Resultative Prepositional Phrases Following Change-of-State Verbs in COHA: Visualization Using Bayesian Estimation and Information-Geometric Distance)

藤原 隆史 (松本大学)

本研究は、Corpus of Historical American English (COHA) を用いて、状態変化動詞 (e.g., break, cut, tear) に後続する前置詞 in 結果句および into 結果句の出現頻度における通時的変化を、年代ごとの in の出現確率を対象としたベイズ推定と確率分布間の情報幾何学的距離 (Jensen-Shannon Distance: JSD) を用いて分析した。分析の結果、19世紀には比較的高めに推移していた in の出現頻度が、1900年頃を境に50%を下回り始め、in から into への構文的転換が進行していたことが分かった。また、1980年代以降は into の頻度が急増する一方、in の出現確率は2000年代以降に0.05前後まで低下し、inの結果句としての構文的役割が希薄化したことが示された。また、JSDの推移から、急激な変化が特定の年代で起きていることも明らかになった。以上のことから、COHAにおいては、状態変化動詞に後続するin結果句がinto結果句によって置き換えられる言語変化が統計的に示された。本研究は、語法変化の時系列的な動態を可視化する新たな手法の有効性を示した。

「情報構造から考える提供動詞を含む構文の交替現象」

(An Information Packaging Approach to the Alternations in Verbs of Providing Constructions)

中野 裕太 (筑波大学 大学院)

英語の *provide*, *supply*, *present*, *furnish* などの提供動詞は補部取る受容者と移動物 (主題) の要素が交替する (Levin 1993: 65)。これまでの交替現象へのアプローチとして語彙意味論での述語分解的な定式化や構文文法での構文の特異性・典型条件の想定がされてきた。本研究は構文が「形式と意味のペア」を成すという定義や「形式が異なれば、意味も異なる」というテーゼに基づき、構文交替には必ず制約がある

ことを実証することを目的とする。本研究では先述の提供動詞を含む構文の交替が「文要素のうち新情報や焦点情報となる要素は文や節構造の終わりに取りやすい」(Huddleston and Pullum 2002: 1372) という談話・情報構造上の原理に従うことをコーパスやインフォーマント調査によって明らかにする。結果として提供動詞を含む構文が不定名詞句 (新情報) や名詞修飾・等位接続などにより weight が高い要素を構文末に取る傾向が明らかになり、談話機能・情報構造の観点から構文交替への制約があることを立証する。

Huddleston, R. and G. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press, Cambridge. / Levin, B. (1993) *English verb classes and alternations: a preliminary investigation*. The University of Chicago Press, Chicago.

第五室 (11月8日午後)

司会 菊地 翔太 (専修大学)

「使役動詞の受動文における原形不定詞補文の歴史的発達」

(The Historical Development of Bare Infinitival Complements in Passive Constructions of Causative Verbs)

外 翔太 (名古屋大学 大学院)

本発表では、使役動詞 *make* と *let* の受動文における原形不定詞補文の通時的変化を統語的に分析する。現代英語の受動文では、*make* は原形不定詞補文を取らず、*let* は特定の動詞に限り許容する。しかし、歴史コーパス EEBO を用いた調査により、両動詞とも原形不定詞補文を取っていたが、初期近代英語までに固定表現 (*make believe*, *let go* など) が大きな割合を占めるようになったことが確認された。ただし、そのような固定表現への収束には時期差があり、*let* の方が *make* より約 200 年早いことが明らかとなった。本発表では、Tanaka (2010[1]) の調査を踏まえて、原形不定詞補文内に機能投射 TP が出現した後、固定表現の割合が増加したことを示す。さらに、受動文において TP 投射を伴う原形不定詞補文が容認されない理由について、統語的に説明する。加えて、固定表現は TP 投

射を持つ重節構造ではなく単節構造を持つため、原形不定詞補文内に現れることが可能であると主張する。

[1] Tanaka, Tomoyuki (2010) “Agreement, Predication, and the Rise of Functional Categories in Nonfinite Clauses,” *English Linguistics* 27, 374-398.

「英語における主語wh疑問文に関する極小主義的分析」

長谷川 優菜 (名古屋大学 大学院)

本発表では、現代英語の主語 *wh* 疑問文 (e.g., *Who likes John?*) と非主語 *wh* 疑問文 (e.g., *Who does John like?*) の語順に関する対比に統語的説明を与えることを試みる。この対比に関して、これまで (i) *wh* 主語が IP 指定部を占めるという主張、(ii) CP 指定部を占めるという主張、(iii) IP と CP 間の投射を占めるという主張がなされている。これらの主張の問題点と派生の経済性等をふまえ、*wh* 主語は CP と IP のどちらにも現れうると主張する。ただし、完全な随意性をもつのではなく、通常は IP に留まるが、特定の談話的条件下で CP へと移動すると分析する。また、当該の状況がどの史的段階で生じたかを調べるためのコーパス調査の結果から、古英語期には CP にまで義務的に移動していたが、中英語期の (非 *wh*) 主語位置の変化に影響を受け、IP に留まる派生も可能になったと結論づける。

第六室 (11 月 9 日午前)

司会 菅野 悟 (東京理科大学)

「異常格標示構文とそのウイルス理論的分析」

荒井 鴻汰 (学習院大学 大学院)

本研究では、英語の ECM 構文のうち、特に例外的な振る舞いを示す異常格標示構文に注目し、文法外的観点からその分析を試みる。異常格標示構文とは、*Who are you sure to be right?* のように、*sure* などの形容詞が *to* 不定詞補文を伴う構文であり、形態的逸脱に加え、*who* の格の所在が不明瞭である点で、統語的に破格な構文であるといえる。本稿では、文法外的考察を通じて、従来見落とされてきた当該構文の形式性および個人言語的性質に光を当て、Sobin (1997[1]) や Lasnik and Sobin (2000[2]) のウイル

ス理論に基づいて、その派生メカニズムを提案する。

さらに、類似構文として、Bošković (2008[3]) による *wager-class* ECM 構文の分析を取り上げ、それに照らして本発表の提案が持つ理論的意義を指摘する。

[1] “Agreement, Default Rules, and Grammatical Viruses,” *LI* 28. [2] “The *Who/Whom* Puzzle,” *NLLT* 18. [3] “On Successive Cyclic Movement and the Freezing Effect of Feature Checking,” Hartmann et al. (eds.), *Sounds of Silence*. Elsevier.

「再帰代名詞と束縛代名詞の分布に対する原理的な説明への試み」

(An Attempt to Provide a Principled Account of the Distributions of Reflexive and Bound Pronouns)

山本 天斗 (九州大学 大学院)

本発表では、代名詞の分布について考察する。生成文法初期以来、代名詞の分布に関して盛んに議論されている (Chomsky (1981)[1], Reinhart and Reuland (1993) [2], Quicoli (2008) [3] 等)。Chomsky (1981) などでは、照応形と代名詞類は (1a, b) のような束縛原理に従うとされた。

- (1) a. An anaphor must be bound in a local domain. (Quicoli (2008: 300))
- b. A pronominal must be free in a local domain. (Quicoli (2008: 300))

(1a) は再帰代名詞が節内で先行詞を持つ (2a) の文法性を説明し、(1b) は同様の構造で代名詞を持つ (2b) の非文法性を説明する (同一指示要素を下線で表す)。

- (2) a. John likes himself.
- b. *John likes him.

しかし、照応形が一見局所領域内に先行詞を持たない事例 (e.g. (3a)) や再帰代名詞と人称代名詞が相補性を示さない事例 (e.g. (3b)) も文法的とされる。

- (3) a. Mary told me that she thinks it would be wise to make herself a dress. (Cantrall (1974: 34) [4])
- b. Max saw a gun near himself/him. (Reinhart and Reuland (1993: 661))

(3) などの例を説明するために、先行研究では (1) の束縛原理が修正・棄却されているが、未だ再帰代名詞や束縛代名詞の分布は包括的に説明されていない。本研究は、Chomsky (2019)

[5] 以降のMERGEを用い、再帰代名詞や束縛代名詞の分布のより包括的な説明を試みる。

[1] *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris. [2] “Reflexivity,” *Linguistic Inquiry* 24, 657–720. [3] “Anaphora by Phase,” *Syntax* 11, 299–329. [4] *View Point, Reflexives and the Nature of Noun Phrases*, The Hague: Mouton. [5] “Some Puzzling Foundational Issues: The Reading Program,” *Catalan Journal of Linguistics Special Issues*, 263–285.

司会 木村 博子 (駒澤大学)

「最小探索に基づくフェイズ主要部 (C, v*) の解釈手続きについて」

北原 久嗣 (慶應義塾大学)

Chomsky (2024, 33-34) は、A'移動と呼ばれてきた現象を、最小探索に基づくフェイズ主要部 (C, v*) の解釈手続きとして捉え直し、Wh疑問文 (1) に対して構造 (2) を付与する分析を提出する。

(1) Who do you think that John saw ___?

(2) [C_Q ... [C ... [_{vP} ... who ...]]]

「who」は外的併合によって、目的語の位置に導入され、内的併合の適用を受けるも、その移動範囲はv*Pフェイズ内に留まる。その後、外的併合がC_Qを導入すると (2) のCPフェイズが完成する。このCPフェイズを読み取る際、最小探索に基づいてC_Qと「who」の間で解釈手続きが行われる。その結果、「who」はC_Qの位置で外在化され、「who」のスコープもC_Qの位置で解釈される。この分析では、内的併合の適用を受けた「who」の位置がv*Pフェイズ内であることから、Chomsky (2021, 27-30) が提起したA'移動とA'移動の分離問題は、フェイズを跨ぐ移動とともに消滅する。本発表では、この最小探索に基づくフェイズ主要部 (C, v*) の解釈手続きを日本語のスクランプリング現象に拡張することを試みる。

Chomsky, N. 2021. “Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go,” 『言語研究』 160, 1-41. / Chomsky, N. 2024. “The Miracle Creed and SMT,” in *A Cartesian dream: A geometrical account of system – In honor of Andrea Moro*, eds. by Matteo Greco and Davide Mocci, 17-39, Lingbuzz Press.

第七室 (11月9日午前)

司会 山田 彬堯 (慶應義塾大学)

「日本語における非典型的主語構文の構造と格付与について」

(On the Structure and Case-assignment in the Non-canonical Subject Constructions in Japanese)

山口 洋輝 (学習院大学 大学院)

可能構文における格交替によって生じ得る格パタンの内、与格主語-主格目的語パターンは不自然となることから日本語には「主格保持の原則」があるとされるが、主格句を欠くカラ/デ格主語文や与格主語のみを項とする文が可能であるとする先行研究がある。与格主語文におけるT主要部が削除されなければならない+NOM及び+DAT素性を持つとする素性一致分析 (Kishimoto 2013[1]) では与格主語のみを項とする文の容認性を説明できない。本稿では、カラ/デ格主語文においてはカラ/デ格句は実際には付加詞で空主語が存在し (cf. Noguchi 2019[2])、他方与格主語は主語位置に生起すると分析した上で、日本語における与格は内格として、主格及び対格は構造的に付与されるとする依存格理論 (Aoyagi 2004[3]) によって非典型的主語構文の容認度の差について説明できることを論じる。

[1] “CASE, TENSE, AND SUBJECT RAISING IN JAPANESE” [2] “On So-called Kara-subjects in Japanese” [3] “Morphological Case Marking as Phoneticization”

「As-Inversion の歴史的発達について」

(On the Historical Development of As-Inversion)

小林 亮哉 (名古屋工業大学)

本研究は、as 挿入節内で随意的に生じる倒置 (as-inversion : AI) の歴史的発達を極小主義の枠組みを駆使して理論的に説明することを目指す。AI は、主語・助動詞倒置、述部の省略、主語への focus stress の付与などを主な特徴として持ち、Culicover and Winkler (2008[1]) を初めとする多くの先行研究では、現代英語の AI の主語は vP 内に留まるとする見解が有力である。本研究は、内項主語や通時的に vP 内に留まらない代名詞主語でも AI が可能である点に着目

し、歴史コーパスを用いて、AIの起源とその発達過程を明らかにする。調査によると、AIはasが確立されたとされる中英語期以降、専ら名詞句主語で生じ、代名詞主語ではほとんど観察されない。本研究は、英語の主語位置の通時的変異を踏まえながら、AIの主語位置について経験的・理論的に妥当な見解を提示することを試みる。

[1] “English Focus Inversion,” *Journal of Linguistics* 44.

司会 水谷 謙太 (愛知県立大学)

「統語論・語用論インターフェースとしての叙述関係と自由拡充：Copy RaisingとProlepsisの分析」

(Predication as the Syntax-Pragmatics Interface and Free Enrichment: An Analysis of Copy Raising and Prolepsis)

坂本 瑞生 (東北大学 大学院)

Copy Raising (CR) とProlepsis (PR) では、主節要素と同一指示の代名詞が従属節に現れるが、適切な語用論的環境のもとでは代名詞を欠く例も容認される (Landau (2009[1]), Gluckman (2024[2])). 本発表は、代名詞を伴う場合/欠く場合のCR/PRについて生成統語論と関連性理論の観点から統一的な分析を試みる。具体的には、叙述の主語が変項を表意において束縛することを求める統語論・語用論インターフェース規則として叙述関係を定式化し、CR/PRは主節要素が従属節中の変項を表意において束縛すると分析する。代名詞を欠く例は、自由拡充という語用論的操作によって変項が導入されると考えることで、代名詞を欠く例が語用論的制約を受ける事実も導き出せることを示す。

[1] “This construction looks like a copy is optional,” *LI* 40, 343-346. [2] “Proleptic objects as complex-NP” *TLR* 41, 765-798.

第八室 (11月9日午前)

司会 森田 千草 (帝京大学短期大学)

「*be hoped to VP* の準助動詞化を支えるメカニズムとその容認度: *be said to VP* との比較分析

(Mechanisms Behind the Semi-Auxiliary Development of *be hoped to VP* and Its Acceptability: A Comparative Study With *be said to VP*)

松田 佑治 (名古屋学院大学)

動詞hopeは、*hope NP to VP型をとると非文となる。しかし、元々の基体である*hope NP to VPを欠いているにもかかわらず、NP be hoped to VPという容認度に揺れがある用法が存在する。この言語事実は、発表者の知る限り、これまで指摘されていない。一方、動詞sayもNP be said to VPの元々の基体である *say NP to VPがない (天野(1987[1])など)。しかし、NP be hoped to VPとは異なり、NP be said to VPは問題なく容認される。そこで、本発表では、まずbe hoped to VPとbe said to VPの準助動詞化を、動的文法理論 (Kajita (1997[2])など) に立脚し、統一した枠組みを用いて説明する。また、両者の容認度の差に対しては、モデル数が増加すると、その分だけ文法拡張力および容認可能性も増加する、と主張する。

[1] 天野政千代「対格付き不定詞とsayの史的統語論」『近代英語研究』 [2] Kajita, M “Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language.”

「動詞jumpと様態・結果の相補性」
(The verb *jump* and Manner/Result Complementarity)

出水 孝典 (神戸学院大学)

本発表では動詞jumpを取り上げ、「様態・結果の相補性」における位置付けを考察する。具体的には、Levin and Rappaport Hovav (2013[1]) によるclimbの分析と同様、動詞jumpには様態動詞のSemelfactiveとして、基本的な「跳ぶ」を表す用法、および「ぎょっとする」を表す用法がある。これらに加えて、結果動詞 (状態変化動詞) でAchievementとしての、数値化できるものが「跳ね上がる」を表す用法があることを、Smith (1997[2])の語彙アスペクト判別テストを援用し明らかにする。

さらに、結果動詞用法が生じる動機付けとして、動詞jumpが表す移動様態は垂直軸に沿った、かつ速い移動であることに着目し、そこから、位置変化、到着点の強調が生じやすいことが基因となり、急速に上に跳ぶことを表す様態が、

結果へと読み替えられ、派生的な結果動詞用法へのシフトが生じていると主張する。

[1] “Lexicalized Meaning and Manner/Result Complementarity,” In Arsenijević et al. (eds.) *Studies in the Composition and Decomposition of Event Predicates*, Springer. [2] *The Parameter of Aspect* (Second Edition), Kluwer.

第九室 (11月9日午前)

司会 安原 正貴 (茨城大学)

「英語における結果構文に対する小節構造分析の妥当性」

(On the plausibility of a small clause analysis of resultative constructions in English)

山口 真史 (関西外国語大学)

本研究は ‘John painted the wall red’ といった英語の結果構文に対して小節構造分析を取ることが統語的に妥当であることを示す。極小主義研究では、この構文に対して「小節構造分析 (Bowers 1997 他)」と「複雑述語分析 (大庭 2011 他)」が行われている。前者では、結果述語と目的語が直接併合して小節構造を構成する構造、または機能範疇が主要部としてはたらく、補部に結果述語が併合し、目的語が指定部に併合する構造が想定されている。一方、後者では語彙意味論における洞察 (影山 1996 他) が反映され、動詞と結果述語が併合する構造を仮定し、その統語体が動詞によって表される動作と目的語が変化する結果状態を表わすと分析される。本研究は英語における結果構文と小節構造の統語的特性を示し、結果構文に対して小節構造分析を取ることの理論的・経験的妥当性を主張する。また、小節構造分析への反論に焦点を当て、問題点も本研究の提案により解決されると提示し、本提案の有効性を示す。

「目的語位置に歩かない実体が生じるwalkについて」

(On Walk with an Entity that Does Not Walk in the Object Position)

中村 哲也 (関西大学 大学院)

非能格動詞 (e.g. *walk, play, speak*) には lexical causative が存在しないという Levin and

Rappaport Hovav (1995 [1]) の主張以来、(1) のような walk の存在は問題となってきた。

(1) I walked her home. (COCA)

しかし、このような walk も他動詞 break 等と同じ特徴を有するため、lexical causative であると分析できる (cf. Nakamura (2024 [2])). 一見したところ、他動詞 walk に関する問題はこれで解決したかのように見えるが、先行研究でもあまり気づかれていない (2) のような他動詞 walk が存在する。

(2) She walked the Father’s Day card to a mailbox. (COCA)

(1) の walk とは違って、(2) のような walk の目的語位置には歩かない実体が生じるため、両者を同じように分析することはできない。そうすると、(2) の walk をどのように分析すべきかという疑問が生じる。

本発表では、(2) の walk を使役移動構文の事例として分析する。さらに、従来、使役移動構文と呼ばれてきたものには2種類存在すると主張する。このように考えることで、(2) の walk が有する特徴に対して妥当な説明を与えることが可能となる。

[1] *Unaccusativity*. MIT Press. [2] “Walk as a Lexical Causative – Where Does Accompaniment Come from?” *JELS* 41

司会 野中 大輔 (工学院大学)

「不変化詞upを伴う句動詞に生じる自動詞構文」

岩宮 努 (三重大大学)

(1a-b) の *pile up, ramp up/ crank up, jack up, rachet up* などは不変化詞 *up* を伴い、「集積物/ 積み上げ機器」を表す語を主要部とし、他動詞として用いられるが、目的語を主語とする非対格自動詞としても機能し (Yoshimura & Taylor 2004 [1])、「積み上げ」を表す。一方、(1c) の *wetsuit up, glove up, sunscreen up* などは衣類や塗布品を表す語を主要部とし、付着させる身体部分が背景化する Zero 補部自動詞であり (Fillmore 1986 [2])、「用意立て」を意味する。

(1) a. ...several workers have {piled up/ *piled} huge debts. (US 2019)

b. Bad debt {piled up/ *piled} at a faster pace... (US 2015)

- c. They {wetsuit up/ *wetsuit} and splash about with the dolphins.

(NZ 2016) (NOW [3])

独自の目的語を伴う句動詞表現だけでなく (Jackendoff 2002 [4]), *up* を伴い、主に名詞として用いられる語を主要部とし、独自の主語を伴って成立、又は暗黙の目的語が背景化する句動詞表現も「構文」として位置づけるべきである。

[1] “What makes a good middle?”

[2] “Pragmatically Controlled Zero Anaphora”

[3] NOW Corpus [4] “E Particle Constructions, the Lexicon, and the Autonomy of Syntax”

第十室 (11月9日午前)

司会 縄田 裕幸 (島根大学)

「前置詞与格構文における語順変異の通時的変化」

(Diachronic Changes in Word Order Variation in Prepositional Dative Constructions)

飯田 昇汰 (名古屋大学 大学院)

中英語における前置詞与格構文 (John gave a book to Mary.) では、直接目的語 (DO) が *to* 付きの間接目的語 (*to*IO) に先行する DO-*to*IO 語順とその逆の *to*IO-DO 語順の両方が観察される。McFadden (2002[1]) はコーパス調査に基づいて、後者の語順は DO の重名詞句転移によって派生されると主張している。

本発表では、McFadden の調査手法および提示された証拠がこの主張を裏づけるには不十分であることを指摘する。そして、新たに実施したコーパス調査の結果として、重い DO の移動を伴わない *to*IO-DO 語順は中英語を通して一定の割合で観察され、最終的に 16 世紀後半までに消失したことを示す。さらに、収集した言語事実に対して統語的分析を与えるとともに、*to*IO-DO 語順の消失は、英語史における代名詞目的語の表層 OV 語順の消失に伴って引き起こされたと説明する。

[1] McFadden, T. (2002) “The Rise of the *To*-Dative in Middle English,” *Syntactic Effects of Morphological Change*, ed. by D. Lightfoot, 107-123, Oxford University Press, Oxford.

「コピー繰り上げ構文の史的発達と FormCopy に基づく統語的分析」

(The Historical Development of Copy Raising Construction and a Syntactic Analysis Based on FormCopy)

中村 丞汰 (名古屋大学 大学院)

(1) に例示するコピー繰り上げ (Copy Raising: CR) に関する先行研究において、同一指示の 2 つの要素が移動により派生されるとする「移動分析」と、それぞれが独立に生成されるとする「基底生成分析」という 2 つの分析が提示されてきた。

(1) John seems as if he has lost his wallet.

しかし、いずれの分析に対しても反例となる経験的事実があるほか、CR の史的発達についても未解明のままである。

本発表では、歴史コーパスを用いた通時的調査により、*as if/though* 節を伴う CR の確立時期とその性質を明らかにする。その結果、付加詞節であった *as if/though* 節が、① *be* 動詞の補部に生じるようになり、② *seem* などの連結動詞の補部へ拡張されたことにより、15 世紀に CR が成立したことが明らかとなった。また、Chomsky (2021[1]) における FormCopy (FC) を用いた CR の分析を提案し、FC に課せられる制約を設定することにより、先行研究における経験的問題を克服可能であることを示す。

[1] Chomsky, N. (2021) “Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go,” *Gengo Kenkyu* 160, 1-41.

〈シンポジウム〉

A 室 (11 月 8 日午後)

*公開特別シンポジウム

「いま、例文を見つめ直す：実りある対話を 目指して」

司会 野中 大輔 (工学院大学)

言語学と一口に言っても、理論やアプローチ、研究対象により、様々な立場が存在する。そのため、言語学者の間で、基本的な事柄について意見の一致が見られないことも珍しくない。しかし、様々な立場があったとしても、言語学の議論の中心にあるのは例文であると言ってよいだろう。ここでいう「例文」は語あるいは形態素のレベルから談話レベルまでのあらゆるサイズのものを指し、作例だけでなく、自然談話などの実例を含む。専門化・細分化が進む言語学だが、例文に焦点を当てることは実りある対話の契機となるように思われる。

本シンポジウムでは、多様なバックグラウンドを持つ4名の講師を招き、それぞれの立場から例文の位置づけや収集方法、作例・実例に対する考え方などを紹介していただき、ともすれば当たり前の存在とされがちな例文を見つめ直す機会としたい。例文を通して互いの立場への理解を深め、健全な議論が行われる場を目指す。

「フィールド言語学における例文の役割」

講師 梅谷 博之 (武蔵野大学)

例文は一般に、主張の裏付けとなる言語事実の存在を読者に示す役割を果たす。これに加えてフィールド言語学の分野では、別の役割にも特に焦点が当たる。本発表はそうした役割を主に2つ紹介し、例文が持つ役割を再認識することを目的とする。

1つ目の役割は、当該言語の構造や当該現象の言語内での位置づけを、当該言語を知らない読み手に説明することである。フィールド言語学の論文ではこのために少なくない誌面が割かれる。2つ目の役割は、当該言語をよく知るところ少数の読み手に対するものである。例文選びには当該言語・現象に対する論文執筆者の理解度が反映される。理解度が低い場合には、かなり特殊な例文や、議論とは関係が薄い例文が

挙げられてしまうこともある。その点で、当該言語をよく知る読み手にとっては、例文は論文の内容の信頼性を判断するための材料としても機能する。

「認知文法と例文：Langacker への（潜在的）誤解を考える」

講師 平沢 慎也 (慶應義塾大学)

本発表では、アメリカの言語学者 Ronald W. Langacker の創始した言語理論である認知文法 (Cognitive Grammar) において〈例文〉とはどのようなものかについて論じる。

具体的には、Langacker の例文が（正確には例文について Langacker が言っていることが）受けがちな（あるいは受けうる）誤解を、二つの観点から検討する。一つは意味の多面性の観点、もう一つは意味の抽象度の観点である。この二方面の誤解はいずれも、文献を局所的に読むという（現代の多忙な研究者がややもすると強いられる）行為となじまない Langacker の文章スタイル、発表・出版スタイルに一究極的にはそうしたスタイルを必然的なものとする Langacker の研究目標に一起因するものである可能性を指摘する。

加えて、時間が許せば、認知文法に立脚する発表者が自分自身の研究において例文を提示する際にどのような点に注意しているか、実際の失敗例も含めて紹介できればと考えている。

「コーパスに基づく定量データの信頼性と解釈の妥当性について」

講師 大名 力 (名古屋大学)

コーパスから得られた例文は定性的分析のデータとしても定量的分析のデータとしても用いられる。現在ではコーパスもユーザーフレンドリーな環境で利用でき、頻度などの定量データを用いる場合も、ソフトやオンラインサービスが自動で計算して結果を返してくれるので研究でも使いやすい。しかし、先行研究で用いられている方法だから大丈夫と、例文そのものを直接よく観察せずに、定量データのみを見て判断しようとする、問題が生じていても気付きにくくなる。コーパスから得られた定量データは何を表すものなのか。データとして有効なのか。検索、数値化、解釈においてどのような点に注意しなければならないのか。本発表では

例文の定量的な側面、コーパスに基づく定量データについて、信頼性と妥当性という観点から検討したい。

「発話の意味はコンテキストで決まる：談話研究の面白さと難しさ」

講師 岩田 祐子 (明治大学)

本発表では、発話の意味がコンテキストの中で生成される様をいくつかの会話データを提示しながら分析し、談話研究の面白さと難しさを考察する。発話の解釈の枠組みであるコンテキストは、方言などの言語形式の特徴、イントネーションなどの音韻的要素、表情やジェスチャーなどの非言語情報、どのような場所で発話が行われたかななどの物理的情報、参加者の人間関係、暗黙の前提など様々な要素から喚起される (Gumperz 1982)。全く同じ発話であってもコンテキストで意味の解釈が異なり、コンテキストがないと意味を解釈することができない。談話分析では、できるだけ自然な会話の収集を試みる。しかし、人々が自然に話している会話を収集することは容易なことではなく、倫理的な問題をクリアする必要がある。またどの場面の誰と誰の発話を収集するのか、データを文字起こしする際に何を含み、何を含まないのかについて研究者の選択が入らざるをえない。

B 室 (11 月 8 日午後)

「生成文法と代数的言語学の新展開」

司会 福井 直樹 (上智大学)

経験科学としての生成言語学と代数的言語学との間には緊密な関係が築かれているとは言いがたく、生成文法の数学モデルの構築が待望されていたが、最近大きな動きがあった。M. Marcolli, N. Chomsky, and R. Berwick (forthcoming) *Mathematical Structure of Syntactic Merge: An Algebraic Model for Generative Linguistics*. MIT Press. が執筆され、併合理論に関する数学モデル (MCB モデル) として代数的言語学に新たな展開を引き起こす可能性がある。本シンポジウムではこの研究を概観し、生成文法と代数的言語学のこれからの展開の可能性について議論したい。さらに、MCB モデルと大規模言語モデルが、言語理論そして脳研究の観点からどのように評価されるかについても論じたい。

「生成文法と代数的言語学」

司会 福井 直樹 (上智大学)

現代生成文法の初期に行なわれた Noam Chomsky による書き換え系の数学的研究が言語研究および関連領域に強いインパクトを与えたにもかかわらず、Chomsky and Scützenberger (1963) の句構造言語に関する代数的研究を最後に、人間言語に関する数学的・代数的研究はその後、(いくつかの重要な研究は存在するものの) 大きな実質的發展を見せなかった。本発表では、何がこのような状況を生んだのかを歴史的背景も交えながら説明し、Marcolli, Chomsky, and Berwick (forthcoming) がどのような意味で画期的研究になり得るのかを論じてみたい。

「探索の数理」

講師 上野 優太郎 (上智大学 大学院)

Marcolli-Chomsky-Berwick (MCB) により提案された併合モデルの代数理論とその言語学的含意を概説する。MCB は双代数論を組み合わせ論経由で生成理論に持ち込んだ。その過程でいわば組み合わせ論による「加工貿易」が起きていることもあり、MCB の数学的道具立ては技術的にかなり「非初等的」なものとなっている。そこで本発表では、併合モデルに基づく最も狭い意味での統辞法について MCB がどのような主張をおこなったのかを言語学のことばで平易に述べ直し、MCB の背後にある言語学的洞察や直観を浮き彫りにすることを試みる。MCB の主張を本格的に理解することを目指される方々のために、あわせて用語法の注意点や学習の道筋も具体的に示す。MCB が言語研究者から然るべき学術的批判を受け取れるよう土壌を整えていくことには意義があると思われ、本発表がその一助となれば幸いである。

「数理的言語モデルの生物学的妥当性」

講師 梅島 奎立 (東京大学)

Marcolli-Chomsky-Berwick (MCB) は意味空間上の近接性に基づく意味論を扱っており、統辞法が生成した木を意味空間に埋め込むモデルを提案している。理論言語学的には MCB モデルの方が、深層学習モデルの代表である Transformer——語を意味空間上に位置づけ、語

同士の有方向的関連を推定するもの——よりも親和性が高い。また大規模言語モデルは生物のネットワークと内実が異なるとしばしば指摘されている。現状の言語モデルは、見た目が現実に似ているシミュレーションを実際の物理定数と全く異なるパラメータで実装した、物理学の「非線形非平衡多自由度系」研究でよくみられたものの一つであろう。関連推定をほとんど無制限にかける言語モデルと対照的に、生物の脳は神経活動の貪欲的ペアリングによって計算量を削減する。言語理論、数理モデル、そして脳研究が相互に与える示唆を検討したい。

C 室 (11 月 8 日午後)

「TAM の万華鏡—他の西欧言語から見た英語の時制 (Tense)・相 (Aspect)・モダリティ (Modality)」

司会 和田 尚明 (筑波大学)

時制 (Tense)・相 (Aspect)・モダリティ (Modality) (以下、TAM) の研究の歴史は長く、英語学においても長年にわたって広く研究対象となってきたが、その一方で、英語における TAM の振る舞いが、あたかもこれらの分野の本質であるかのような扱いが暗黙裡のうちに前提となってきたきらいがある。

しかしながら、他の西欧言語における対応形式の TAM 現象が、英語の場合と一致しないことも多い。例えば、英語の現在完了形には認められる継続用法 (例: John has lived here since 1999.) は独仏蘭語では単純現在形で表すのが普通であったり、英語の現在完了形は、通例、定過去時副詞類と共に起できない (例: *Mary has played the flute yesterday.) のに対して、独仏蘭語の現在完了形は普通に共起できる。

本シンポジウムでは、仏西蘭語の TAM との比較を通して英語の TAM を見ることで、その特徴 (特異性) を認識してもらい、これらの言語間の違いを相対化するメカニズムを探っていきたい。

「Be Going To・Aller・Gaan

—英仏蘭語の GO 未来の対照研究—

講師 和田 尚明 (筑波大学)

本発表では、英仏蘭語の GO 未来と呼ばれる形式の類似点と相違点について、各形式の時間構造と文法化の度合いの観点から考察する。

時間構造については、GO が表す「予備段階」が現在時に当てはまっていることから類似点を説明できることを見る。その一方で、be going to は、GO の進行形と to がもつ意味機能的特性が時間構造に反映しているのに対して、aller と gaan の時間構造にはそのような特性が反映していない点が相違点の根底にあると主張する (Wada 2019[1])。

次に、be going to、aller、gaan の順に文法化の度合いが低くなるが、それを引き起こす駆動力として「話者意識への引き寄せ (C-牽引)」 (Wada 2018[2]) という概念があり、それが、一次文法化・二次文法化 (Nicolle 2012[3]) を含めた形での文法化の度合いの違いの中に反映していると主張する。

[1] *The Grammar of Future Expressions in English*, Kaitakusha. [2] “C-Gravitation and the Grammaticalization Degree of ‘Present Progressives’ in English, French, and Dutch,” *New Trends in Grammaticalization and Language Change*, John Benjamins. [3] “Diachrony and Grammaticalization,” *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*, Oxford University Press.

「フランス語の現在形の特徴

—英語との比較—

講師 渡邊 淳也 (東京大学)

本発表では、フランス語の (単純) 現在形の特徴を、おもに英語と比較することで明らかにする。

まず、フランス語には英語のように十分に文法化した進行形にあたる形式が存在しないことがあげられる。<être en train de +不定法> という迂言形は存在するが、煩瑣な形式であるため、ことさらに「...している最中」と述べる場合にしか用いられず、通常は現在形が用いられる。結果として、現在形が進行の解釈なのか、習慣の解釈なのか曖昧な場合もある。また、語りの現在形の使用頻度が英語より明確に高いこともフランス語の特徴である。これらのことから、フランス語では現在形の使用頻度が総じて高いことが明白である。

つぎに、フランス語の語りの現在形などの用法に着目することにより、フランス語の現在形

の時間指示機能が本質的に直示的な、すなわち Benveniste (1974) [1] や Meillet (2001) [2] のいう「自己指示的」なものであることを主張する。
[1] *Problèmes de linguistique générale*, tome 2. [2] « Valeur aspectuelle du présent : un problème de frontière », *Cahiers Chronos*, 7, 27-39.

「スペイン語の進行形の特徴 —英語との比較—」

講師 山村 ひろみ (九州大学 特任研究者)

スペイン語はフランス語、イタリア語と同じく俗ラテン語が発展してできたロマンス諸語のひとつである。このロマンス諸語に属する言語間には多くの類似点があるが、同時に様々な相違点があるのも事実である。英語の *be+ing* が示す進行形に相当する形式が存在するか否かという問題はその相違点のひとつと言える。

スペイン語には *estar+Vndo* (*be+現在分詞*) からなるいわゆる進行形が存在する。形式的には英語の *be+Ving* とほぼ一致しているが、その振る舞いは英語のそれとはかなり異なる部分があるように見える。そこで本発表では、まず、スペイン語の *estar+Vndo* と英語の *be+Ving* の類似点と相違点を各語の主たる規範文法書の記述を基に、特に、当該形式によって表される事態のタイプ、時制などの観点から示す。その後、スペイン語の *estar+Vndo* に焦点をあて、その機能的特徴を明らかにしていきたい。

「特別講演」

第一講演（11月9日午後）

司会 堀内 ふみ野（日本女子大学）

「言語学と社会・言語学とメディア」

井上 逸兵（慶應義塾大学）

言語学は浮世離れた学問と思われる向きもあるかもしれないが、実際には多分に社会的背景を反映しつつ発展してきた。本論では、近現代言語学の系譜をたどりつつ、この分野を社会的にコンテキスト化してみたい。言語学が最も輝いていたと思われる時代の社会における受容、大学や学会を通して学問分野の権威が認知されてきた社会状況にふれつつ、言語学が、特に出版や各種メディアとどうかかわってきたかを、今後の展望を含め考えたい。『Language』誌に新設された“Teaching Linguistics”セクションやインターネットメディアの「言語学コミュニケーター」の存在は、言語学の価値が自動的に与えられるものではなく、「語られ方」と密接に結びついていることを示唆していると思われる。優れた研究も、適切な「物語化」とメディア戦略なしには埋もれてしまう現代において、学問は研究内容と同様に「いかに語るか」が問われている。知のシステムが動揺する中、言語学の語り方のいくつかの可能性を探ってみたい。

第二講演（11月9日午後）

司会 野中 大輔（工学院大学）

「直観判断と英語の実態の齟齬を考える —実証的英語語法研究の立場から—」

住吉 誠（関西学院大学）

言語研究のデータソースの大規模化や多様化は、これまでの理論的研究が、英語の実態を単純化するきらいがあったことを明らかにした。近年、海外では直観判断とコーパスなどの実例データの関係を再考する研究が陸続と出版され、日本でも「英語の言語事実の単純化」を再考すべき問題として議論する研究も増えてきた（住吉他（編）（2019[1]）、渋谷他（編）（2024[2]）など）。

本講演では、直観をデータに英語研究を進めることの問題点を概観し、直観では捉えきれない多様な英語の実態に触れる。言語研究においては直観を全く排除すべきであると主張する極めてラディカルな考え方（Sampson and Babarczy 2014 [3]）もある中で、外国語としての英語の理解には、多様なエビデンスに基づく「穏健な」実証研究が必要であることを見てみたい。

[1] 『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』開拓社 [2] 『新しい認知言語学』ひつじ書房 [3] *Grammar without grammaticality*, Mouton.

第三講演（11月9日午後）

司会 熊谷 学而（関西大学）

「一般言語学から見た英語と日本語」

窪蘭 晴夫（国立国語研究所）

一般言語学の知識を持って日英語を分析すると、それまで見えなかった両者の特徴や共通性が見えてくる。本講演では、一般言語学が日英語の音韻構造にどのような知見を与えるか、逆に日英語の音韻研究が一般言語学にどのように貢献するかを検討する。

俎上にあげるのが音節量を巡る諸現象である。たとえば、日本語（東京方言）と英語のアクセント規則は従来まったく異なる定式化がなされていたが、音節量という概念を用いて共通の土俵で分析すると、ほぼ同一の規則であることが分かる。また、英語史では閉音節短母音化（CSVs）という現象が報告されているが、この背後には超重音節（3モーラ音節）を避けようとする原理・制約が働いている。この原理は実は日本語にも働いており、日本語ではCSVsを含む複数の手段により超重音節を避けようとしている。一般言語学・音韻理論を踏まえて分析すると、両言語が非常によく似た特性を持つことが分かる（[1]）。

[1] 窪蘭晴夫（2025）『一般言語学から見た日本語の音韻構造』くろしお出版。